

大麦管理情報 (第8号)

1 気象経過

- (1) 3月の平均気温は8.2℃(平年差+1.9℃)とかなり高く(図1)、降水量は165.0mm(平年比104%)と平年並みだった(図2)。日照時間は129.8時間(平年比99%)と平年並みだった。
- (2) 4月上旬の平均気温は8.7℃(平年差-1.4℃)と低く、降水量は52.5mm(平年比115%)と多かった。日照時間は44.5時間(平年比78%)と少なかった。

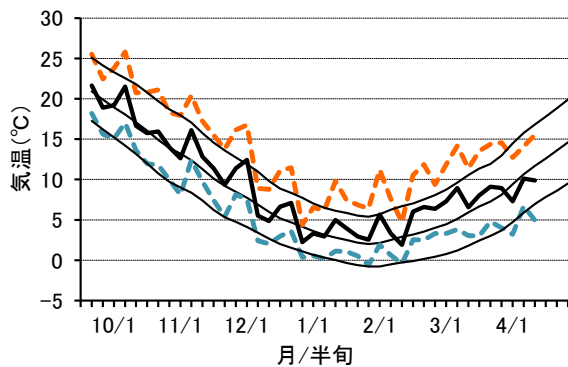


図1 気温の推移(富山地方気象台)

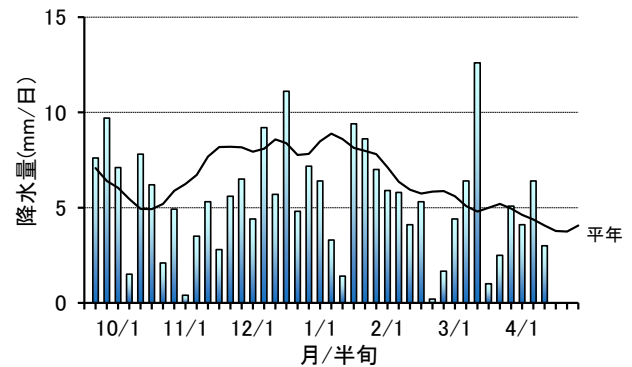


図2 降水量の推移(富山地方気象台)

2 生育概況

- (1) 葉齢は、13.6葉(平年差+1.0葉)と平年よりやや進み、幼穂長・穂長は、4.5cm(同+1.2cm)と平年よりかなり長くなっている(表1)。
- (2) 草丈は、平年よりかなり長く(同+20.6cm)、茎数は、平年より少なく(同-104本/m²)、葉色は、平年並み(同+1.1)となっている(表1、図3左、図4左)。
- (3) 葉齢を揃えて比較すると、茎数は平年並み、葉色は平年よりやや淡くなっている(図3右、図4右)。
- (4) 止葉展開期は、県平均で4月1日と平年より10日早くなった(表2)。

表1 大麦生育観測ほ等調査結果(4月15日)

(播種様式:ドリル)

	播種日 (月/日)	苗立数 (本/m ²)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長・穂長 (cm)
				(本/株)	(本/m ²)			
31年産	10/8	178	73.0	2.8	479	13.6	44.1	4.5
30年産	10/5	197	52.6	2.8	553	13.2	40.6	3.6
平年	10/6	176	52.4	3.3	583	12.6	43.0	3.3

注) 近年は21~30年産の平均

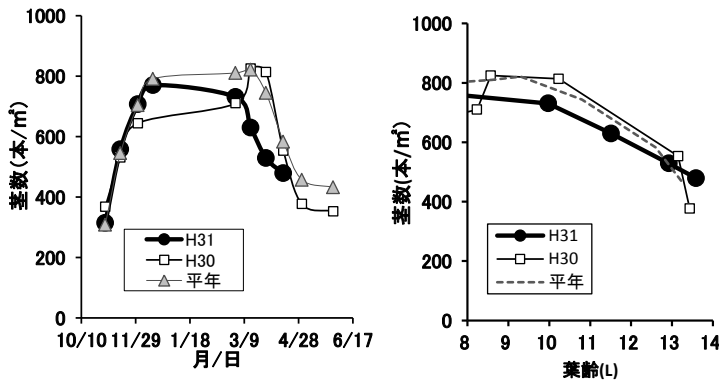


図3 茎数の推移 (左:日数ベース、右:葉齢ベース)
注) 近年は21~30年産の平均

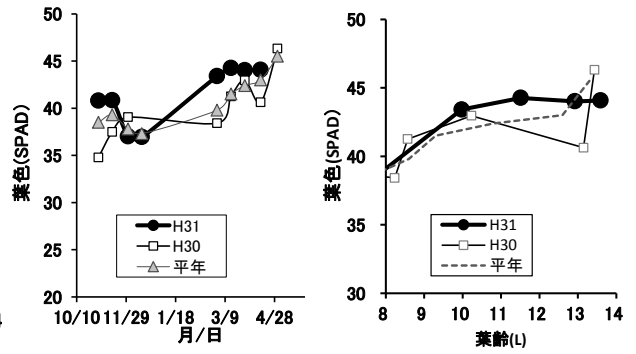


図4 葉色の推移 (左:日数ベース、右:葉齢ベース)
注) 近年は21~30年産の平均

(5) 出穂期は、地域による差が見られるが、県平均で4月14日頃と見込まれる。また、成熟期は、出穂期以降の平年気温から生育を予測すると、県平均で5月31日頃と見込まれる。

出穂期以降の気温が平年より+1℃高く
推移した場合は (5/29)

表2 生育ステージの見込み (4月15日現在)

	止葉展開期	出穂期	成熟期
31年産	4/1	(4/14)	(5/31)
30年産	4/13	4/23	6/3
平年	4/11	4/22	6/3

注1) () は見込み

注2) 31年産の成熟期は出穂期以降の気温が平年並みで推移した場合 (積算気温774℃) の予測日

注3) 平年は21~30年産の平均

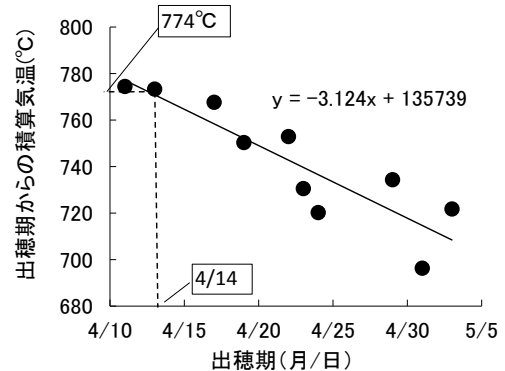


図5 出穂期と積算気温の関係

注) H21~30年産 生育観測ほの平均値
積算気温は富山気象台の日平均気温を使用

3 当面の技術対策

(1) 赤かび病防除の徹底

検査規格における赤かび粒の混入限度は0.0%と厳しい基準となっているため、赤かび病の防除を徹底する。

- ①既に出穂期を迎えているほ場があることから、防除は遅れずに、穂揃期 (開花始め) とその7日後の2回防除を確実に実施する。
- ②防除効果は液剤の方が高いため、特に1回目の防除は、可能な限り液剤による防除を行い、規定量の薬剤が確実にかかるようにする。
- ③防除適期に降雨が多い場合でも、適期に散布することを優先し、短い晴れ間を利用して、確実に防除を実施する。
- ④無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。
- ⑤防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。

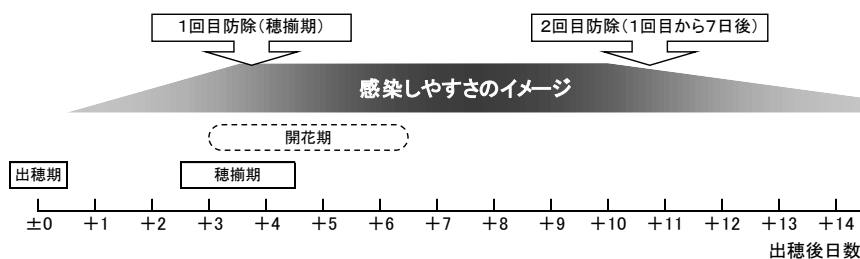


図6 赤かび病の感染しやすさのイメージ (広域普及指導センター作図)

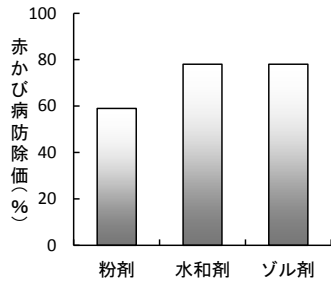


図7 トップジンMの剤型による防除効果の違い
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

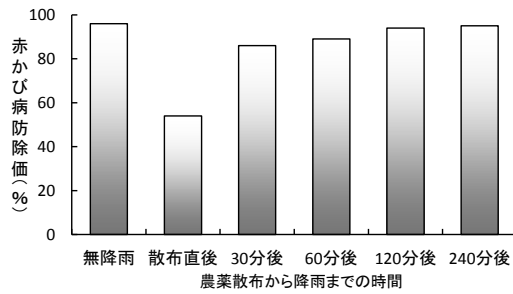


図8 農薬散布から降雨までの時間が防除効果に及ぼす影響
注) 防除薬剤：トップジンM水和剤
降雨は強い雨 (25 mm/h) を2時間継続して実施
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

表3 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数	散布量 /10a	使用時期 (収穫何日前まで)	使用回数	作用機構分類等※3
1回目： 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	3回以内※2	B(1)
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	G(3) DMI
2回目： 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500倍	150 ^{リットル}	30日	3回以内※2	B(1)
		トップジンMゾル※1	1,500倍	150	14	3※2	
	(無人航空機による散布)	シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	G(3) DMI
		チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1	
		ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	
	(無人航空機による散布)	ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3	C(11) QoI
トップジンMゾル※1		8倍	0.8 ^{リットル}	21日	3回以内※2	B(1)	
シルバキュアフロアブル		16	0.8	14	2	G(3)	
チルト乳剤25	8	0.8	21	1			
ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3			

※1 取り扱いメーカーによっては、適用がないので注意する。
 ※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。
 ※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する。
 QoI 剤は1作期1回までの使用とする。DMI 剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。

(2) 排水対策

- 出穂後の登熟条件を良好に保つため、排水対策を徹底し、根の健全化を図ることが重要である。
- 水稲作業が始まると、用水や隣接田からの漏水の可能性があるため、水口や畦畔を点検するとともに、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底し、湿害を確実に回避する。

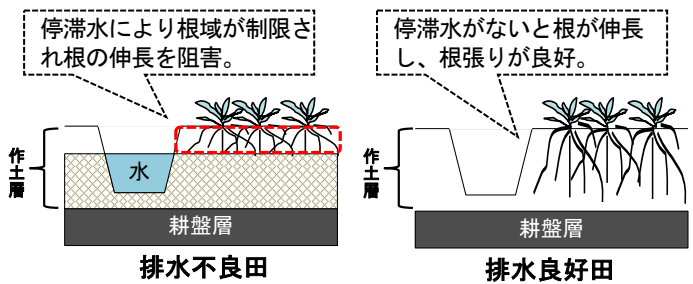


図9 排水の良否と根の伸長のイメージ

(3) カラスノエンドウの除去

- 実需者から、異物混入防止の徹底を求められており、特に、カラスノエンドウの種子の混入防止が重要である。
- ほ場内に侵入してからの除去は労力を要するため、ほ場周辺でカラスノエンドウを見かけたら速やかな除去に努める。



写真 カラスノエンドウの開花